

## 第22回 口腔機能って何だろう？

＝ 「口腔機能」は、口腔運動機能の改善によってその機能は改善される ＝  
(その1)

北九州在宅医療・介護塾  
塾長 久保 哲郎

前回までは、口腔機能改善を図る方法として、「療養者に人として寄り添い、心の在り方に配慮する」、「認知機能改善を図る」、そして「感覚機能改善を図る」ことについて紹介しました。

今回からは、「口腔運動機能改善を図る」ことについて紹介します。

ところで、「長期寝たきり」になると、何故、1日中口が開け閉めできない「開口状態」で、「瞼を閉じた状態」になってしまうのでしょうか？

その理由は、「長期寝たきり」になると下顎骨が重力によって後退位に沈下すると共に、顎運動関連筋群の硬直によって開口状態のまま固定されるからです。

開口状態が固定化されると、送り込みや嘔吐・咳嗽、嚥下への障害や、顎関節の拘縮によって咀嚼運動にも障害等が起きてしまいます。

また、口唇閉鎖が出来なくなったり、舌根が咽頭部に沈下し固定されることによって、摂食・

嚥下のリズムの内“口腔期”において咽頭への送り込みが行えなくなります。

そして、呼吸路が狭窄されることで呼吸が早く浅くなるため、血液中の炭酸ガス濃度が高くなる等によって傾眠状態に陥りやすくなり、その結果として瞼を閉じてしまいます。

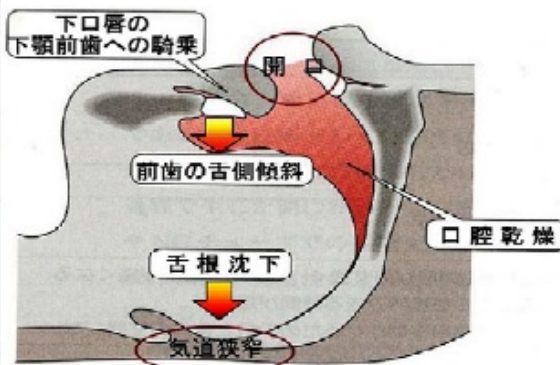
このように長期に「寝たきり」が続くと歯・口腔に様々な変化が生じ、その結果として「食べられない、飲み込めない」等の口腔運動機能低下が生じてきます。

そのため、「寝たきり」の状態にある長期療養者の方には、下顎骨が後退位に沈下しないようにベッドの傾斜角度を工夫すると共に、日々の「口腔ケア」を行う際には口腔運動筋群に対し廃用状態に陥らないようにマッサージやストレッチ等を行うことが求められます。

次回からは、口腔運動機能改善を図る方法について紹介します

### 「長期寝たきり」による歯・口腔の変化

仰臥位によって生じる変化	臨床上的問題
下顎が後退位で固定される	開口状態になり、口腔乾燥する。送り込みや嘔吐・咳嗽、嚥下が障害される。口腔衛生状態が低下する。
顎関節の拘縮	咀嚼運動が制限される。
下口唇が口腔内に入り込む	下顎前歯を舌側に傾斜させる。口唇閉鎖を障害する。
舌根が咽頭に沈下して固定される	呼吸路が狭窄するため、呼吸が早く浅く、炭酸ガス濃度が高くなる。傾眠になり、意識レベルを維持できる時間が短い。舌で口腔から咽頭に食物を移動させるための舌と食塊の空間が短い。
軟口蓋と舌が常時接触する	軟口蓋筋が短縮し、軟口蓋上が障害される。



(「臨床の口腔生理学に基づく 摂食・嚥下障害のキュアとケア」：館村 卓、医歯薬出版、2009)